

地域ネコの話

野良ネコを、地域住民が皆で管理していこうというのが「地域ネコ」の考え方です。

うちのネコではないけれど、放っておいても問題は解決しないので、決めた時間と場所でエサやりを管理したり、避妊・去勢手術をしたり、きちんと生活をコントロールしていくことでネコが天寿を全うするまで付き合っていこうとするものです。

わが家のご近所でも

私の自宅のある集落にも地域ネコがいます。特に話し合っただけではないのですが、ネコ好きの家が2軒あって、そこが主に世話をしており、ネコは、子どもたちの遊び道具になっています。

昨年から出沒し始め、いついてしまったミントという名のネコは、この春妊娠していることが分かり、近所の奥さんが動物病院に連れて行って、墮胎と避妊手術を受けさせました。術後は元気なく、奥さんの家のベランダでぐったりしていましたが、今は回復して、近所をうろつき回っています。昨日は、子どもたちが、巣から落ちた雀の子を拾い、そこにミントが現れてちょっとした騒ぎになっていました。

動物病院の薬袋

動物病院でも、治療のあと薬を渡されますが、薬袋には、患者の名前を書きます。通常、飼い主の苗字に、治療を受けた動物の名前を書きます。

近所の奥さんがミントを動物病院に連れて行ったとき、森さんと増田さん長尾さんの家の子どもたちもついて行きました。地域ネコなので、ミントは苗字を持ちません。薬袋に書く苗字を決めるために、子どもたちが代わる代わるミントに呼びかけたそうです。

「森ミントさん」・・・「ミャー」

「増田ミントさん」・・・「ミャー」

「長尾ミントさん」・・・「ミャー」

結局、苗字は決まらなかったそうです。

野良ネコ問題の問題点

イヌは、狂犬病があるし、噛み付かれると人間が大ケガをするので、法律で捕獲することが定められています。予防注射や飼い方について、飼い主は責任を負います。

イヌは、野良になると捕獲され、飼い主や引き取り手が見つからない場合は、法律に基づいて殺されてしまいます。しかし、ネコについては、そのような法律はないのだそうです。従って、野良ネコがうるさいからとか、床下で子どもを産んでいるから捕獲してくれ、と役所に電話しても、それに対応する法律がないので、行政は動きが取れないのだそうです。

それでも、現実には、毎年相当数が持ち込まれ(その多くは、子猫)処分されているそうです。また、その数は、年々増加しているそうです。

野良ネコが、庭の菜園にウンコする、車のボンネットに登って傷をつける、オシッコが臭いなどの迷惑を被っている場合、極端な人は、「あんなものは行政がまとめて捕獲して処分してし

まうべきだ」「法律がないなら、条例をつくれ」などと言います。一方、ネコ好きにすれば、同じ生きとし生けるもの、相憐れんで世話をします。

(ネコを捕獲・処分する) 条例をつくれと言われても、行政も議員も、それはアンタッチャブルのテーマでしょう。やはり、「どんどん捕獲して殺してしまえ」というのは、採用できる手段ではありません。一方、エサを与えるだけというのも無責任な行為です。生きていれば子どもを生みます。子猫は、捕獲されれば、現実問題として処分されます。“死ななくてもいいはずの命” が生まれ続けることまで、よく考えてネコに接する必要があります。

市役所の掲示板を覗いてみよう

市役所の前に、公的な文書を掲示する掲示板があります。ガラスの戸がついていて、中に、ヒモで綴じられたり、画鋏で止められたりした書類があります。どれも、市長のハンコが押しとあります。(あの掲示板には、実はカギはかかっていません。知っていました?)

書類の中には、「　　さん、あなたは税金未納ですが居場所がわかりません」というような、その情報を伝えたい相手には絶対に伝わらないであろうものが結構あります。

そうした多くの書類の中に、「イヌを捕獲しました。犬種は　　で、性別はメスで・・・」というような書類もあります。よく電柱の張り紙で「うちのジョンを探しています。ミニチュアダックスの3歳のオスで、6日の夕方、スーパー　　の駐車場でいなくなりました。・・・」というのを見ますが、その内容を行政的に硬くしたような文面です。

「イヌを捕獲したので心当たりの人は連絡ください(然るべき後、処分します)」ということ伝える文書だと思いますが、おそらく、「掲示板を見て来ました」などというのは、皆無ではないでしょうか。ネコに関しては、こうした掲示をする法律がないので、それさえもできないということでしょう。

ネコ問題検討ワークショップ手法の開発

子飼商店街がある碩台小学校区で、先日、野良ネコ問題を考えるワークショップが開催されました。この地域は、市内でも有数の野良ネコ問題地区のようです。

私は、その企画・運営を担当したのですが、強硬派も共生派も参加して、結構大変でした。ワークショップでは、感情論が展開されることは容易に予想されましたので、まず、獣医さんに、ネコの生態や繁殖行動について講義をしていただき、参加を“にわか専門家”にすることから始めました。例えば、ネコは年に3回妊娠・出産する可能性があること。飼いネコであっても、オスについてはしっかり管理する必要があること。さもないと外に出かけて、メスの野良ネコを妊娠させるからです。発情期には、10kmも先まで出かけていくそうです。

野良ネコ問題には、ネコを捨てる人、諸々の被害を受けている人、エサを与える(だけの)人、行政、ペットショップ、買い猫がいる家の人など、様々な人が関係します。地域によって、野良ネコ問題の構造に違いがあります。それを、ワークショップの参加者が共通に理解することが、出発点の作業として重要です。

そこで、現在、こうした多くのプレイヤーが、どのようにその地域の野良ネコ問題に関わっているか、その構造を俯瞰できるようなグループ討議の小道具をつくっています。子どもでも理解できるような、楽しいゲームのようなものにするつもりです。

わが家の近所の子どもたちは、ネコにエサを与える際、例えば、骨のついた鶏肉は食べさせません。骨が針状になってノドに刺さるからだそうです。子どもでも、本格的な知識と技術を身に付けるべきです。そのような“学び”をしながら、地域ネコを考えることが有効です。